

後となったピストル自殺の前後を生き生きと語っていく。

ゴッホのカルテとして中毒症・躁鬱病・ポルフィリン症・癲癩・梅毒・分裂病にわけて論じられている。そして、著者は「この天才芸術家に捧げることができる最良の診断は、彼がヴァン・ゴッホ病にかかっていたということである」と結んでいる。まさにゴッホはゴッホ自身を病んでいたという、この指摘はきわめて示唆的である。

ついで、看護婦の神様として崇敬されるナイチンゲール、彼女はヒステリーであつたため、九十歳の高齢で亡くなるまで各界の人びとを悩ませたという。

そのヒステリーの研究で知られる精神分析学の創始者フロイトがヘビーな葉巻喫煙者で、そのため口蓋癌にかかり、三十一回もの手術のすえに死んだ。そして、最後に作中の人びととして、マクベス、ほら吹き男爵、シャーロック・ホームズがあげられている。ホームズの一章はワトソン先生とフロイト先生との往復書簡という形式になっていて、ホームズ・ファンにはとりわけ興味深いであろう。

姉妹編として同じ著書と訳者による『歴史は病気でつくられる』が邦訳出版されている。あわせ読まれることをおすすめしたい。

一読思うことは、人間の歴史をつき動かしているのは、人間の考え出した主義でも思想でもなく、むしろ人間の病気や生理というものかもしれない——、という思いである。

(立川 昭二)

〔時空出版・東京都文京区小石川四一八―三、電話〇三―三八二―五三―三三、平成十一年一月、四六判、三九四頁、本体二、四〇〇円〕

吉元昭治著

『不老長寿への旅 ニッポン神仙伝』

不老長寿とは道教が最終目標に掲げているものであるが、同時にそれは人類の長年の夢でもある。現代医学はその夢に向かって突き進んできたが、最近では平均寿命の更新は必ずしも歓迎されないものとなっている。ねたきり・痴呆への恐れや不安が人々の心を占領しつつあるからである。

本書は、夢を追いかけてつづけた道教が日本の古代社会にかなる影響を与えたのか。またその影響が現代の日本社会における風習や民間信仰、祭祀といったものの中にどの程度の痕跡を残しているのか。そのあたりの事情を平易にまとめたものである。

第一部「仙人物語」は「不老不死のいきつくところは仙人」「不老長寿」の歴史、「仙人とは」「修験道の開祖『役行者』」「仏教説話の中の仙人たち」「物を飛ばす仙人たち」「江戸の仙人」「滑稽な仙人たち」「女の仙人」「本朝神仙伝」と『元亨釈書』に見る仙人」「まとめ」の全十一章から成る。ここでは記紀・仏教説話集・神仙伝を主材料に、日本の仙人像を描出し、中国のそれとの違いを明らかにする。また道教が日本社会に与えた影響とその足跡をたどる旅を展開させ、道教と

現代日本との接点を論じる。

第二部「不老長寿物語」は「不老長寿の食べ物」「桃」「菊」「橘」「酒」「朱」「靈芝」「煎じ薬のルーツ」「胞衣壺」「勾玉」「薬」「僧医と看病禪師」「医薬の神々」「常世の神」「まとめ」の全十五章による構成で、かつて仙薬として珍重されていた薬物にまつわるエピソードとその効能について論じ、またそれに関連する史跡を紹介する。

本書が対象としている領域は、これまでも歴史・宗教・民俗・国文の人たちによる研究の蓄積があり、本書は特に目新しい論点や材料を提供しているわけではない。肩の凝らない読物、誌上の楽しい散策といった感じである。本書によってこの分野に興味を覚えた方への道しるべとして、巻末に参照・参考文献の一覧がほしいところである。

(新村 拓)

(集英社・東京都千代田区一ツ橋二一五一—〇、電話〇三—三二三〇—六一四一、平成十年十二月、四六判、二六八頁、本体一、九〇〇円)

安川里香子著

『森鷗外「北游日乗」の足跡と漢詩』

ひとことでは本書は、森鷗外の『北游日乗』の詳細な注釈である。『北游日乗』とは、明治十五年二月十三日から三月二十九日にかけて、二一歳の軍医副・森林太郎が徴兵検査に立ち合いのために群馬・長野を経て新潟各地をまわる旅中、

漢文体で記した日記で二八首の漢詩(七言絶句)をふくむ。ところでそもそも注釈とは何であるか、本書はいかなる性格をもった注釈であるのか。

本書の扉に「長谷川泉先生 蒲原宏先生 故小島憲之先生に捧げる」という献辞が記されている。印象的であるとともに、本書が内蔵している三つの性格をよく象徴している。長谷川泉氏は日本近代文学研究の第一人者であり、学術雑誌『鷗外』を機関誌として発行して事務局を鷗外旧宅趾の本郷区立鷗外図書館内におく森鷗外記念会の会長として知られる。本書も同誌五九・六〇・六一・六二(平成八年七月〜同十年一月)にわたった連載稿に加筆訂正して成ったものである。本書第一の性格として、『北游日乗』という言語表現を通じた青年鷗外の精神世界の照射という点がまずあげられる。従来、鷗外漢詩に関する先行研究やこの作品に関する専論も皆無ではないが、汗牛充棟の鷗外研究の中にあつてはそれでも比較的研究のたち後れている作品に属するのではあるまいか。その作品が以下に述べる詳細な語釈・注釈と平易な訳文を得て近づき易い形で提供されたことは、歓迎すべきことである。

次にわが日本医史学会の理事長・蒲原宏氏については、今更述べるまでもないが、国内外の医学史を網羅する該博な造詣に加えて、郷土・新潟の医学史の知識は他の追隨を許さない。本書が、蒲原氏の郷土史・医学史の知識を存分に享受して成り立っていることは一読にして了解されるところである。ある意味で歴史はすべて地方史である。各地方の各種の